

白文が貴誌にも、「作歌八十年」にも記載されていないので。窺い知る機会が無いことは誠に残念です。

「九日の旅」の文中に、奈良女子大学における記念講演会を控えて、間島琴山氏が佐佐木先生の和歌を朗詠された状況を「自分は一人の聴衆として、おのが作品の美しく吟ぜられてゆくのを聞いた。」と記録されています。その「おのが作品」については『思い草』の昔から、半世紀を超えてる作品につき一集一首の抄出ですべて十二首、最も感慨深く耳傾けた者は、おそらく作者なる自分自身であったろうかと思つた。」と記述されるほど衆芳歌から撰ばれた白眉の十二首の歌集を周知する機会を与えてほしいものです。「逝く秋の」の合唱曲として作曲された美しいメロディーが奈良を訪れる人々によって再び愛唱されることを望んで楽譜を添えて欄筆をいたします。

(奈良西ノ京 薬師寺副住職) ※原文のまま。ただし、ふりがなは編者による。


展示室だより 「逝く秋の…」この歌は、歌集『新月』をそして歌人信綱を代表する一首といわれている。時は晩秋ところは大和の国、奈良西ノ京。その薬師寺の塔の上を一片の雲が飛んでゆく。秋という時間、塔の上の空間、その交点にあるひとひらの雲というのは、まさに象徴的といえようか。さて、この名歌はいつごろ詠まれたものか、「九日の旅」のなかで信綱は「たまたま一旅人として明治の末

年頃に訪れ、晩秋の日に思ひを寄せた諷詠が、かく久遠に遺るといふことは夢のような心地がする…。』と回想している。この作をふくむ「大和めぐり」には他に「秋さむぎ唐招提寺鴉尾の上に夕日うすれて山鳩の鳴く」「秋雨に飛鳥を行けば遠つ世のおもひするかな秋の花ちる」などがある。

(文化財保護課 辻 正)

編集機から 松久保秀胤師から「薬師寺東塔讀歌」の楽譜をいただいたので、さっそく市教育委員会の渥美和美先生にお願ひして歌つていただき、その感想をうかがつた。

「前奏十一小節は主旋律を予測させるような和声進行になり、おごそかで、しかもさわやかなメロディラインになっています。主旋律は歌詞を大切に、イメージを損わないように作曲されていて、逝く秋の大和の国の薬師寺のはゆつたりと流れ、塔の上なる」で上行し、充分にのびして「ひとひらの雲」はpp(ピアノッシモ)で入り、緊張感をもって歌われています。また、後奏の三連符のアルペジオも、雲をゆつたりと見ているような余韻を残して、しつとりとした感じになっています。」さすが専門家だけに音楽用語を使った感想はややむずかしいが、いま仲間の先生方三人でピアノ伴奏二部合唱をテープに吹き込んでもらっているの、今秋の特別展では「幻の名曲」を、はじめて鈴鹿路で聞いていただけるものと今から期待している。(辻)

	
目次	奈良薬師寺歌碑 建立懐想
信綱一首(十二)	松久保 秀胤
展示室だより	村田 邦夫
辻 正	夫
・鈴鹿市教育委員会文化財保護課 (TEL・〇五九三・八二・九〇三二) 〒五一三 鈴鹿市神戸九一―一―一五 ・佐佐木信綱資料館 (TEL・〇五九三・七四・三二四〇) 〒五一三 鈴鹿市石薬師町一七〇七七	

逝く秋の大和の国の薬師寺の

塔のうへなる 一ひらの雲

歌碑建立懐想

松久保秀胤

今 私の机上に黄ばんだ一冊の「薬師寺歌碑建立表白・九日の旅・心のふるさと」小冊誌があります。

昭和三十年五月二十九日 佐佐木信綱先生の衆芳歌の中の人口に膾炙されている一首「逝く秋のやまとの国の薬師寺の塔のうへなるひとひらの雲」の歌碑が東塔の菩提樹の緑蔭に建ち、除幕式に光臨を賜うした小旅行の記録誌であります。

五月二十四日熱海駅御出発から、六月一日御帰着までの見聞交情を詳細に御自身作文なされ、建碑当日の情景を彷彿とさせる記録誌であります。

薬師寺東塔の昭和二十七年秋に完成した時、



薬師寺東塔

落慶法要を十月十一日に執り行ないました。その法要次第の中に「東塔讀歌」と題して、佐佐木信綱先生の「逝く秋の」の一首と會津八一先生の「南京新唱」の一首「水煙の天つをとめが衣手のひまにもすめる秋の空かな」の二首を唱歌にして、導師の慶讃文にあわせて東塔の美しさを賞讃し、参拝者の方々にも随喜していただくことを企劃いたしました。

当時 副住職高田好胤、私の若僧は二十七年四月ころ、相談のために奈良市坊屋敷町の前川佐美雄邸をお訪ねしました。「二首を並べることは良いとは云えませんが」と明言されましたが、協力すると約束して下さいました。

作曲については奈良女子大学教授 前田卓央氏を推薦して下さいました。四月下旬、大学に前田先生をお訪ねして

後日、音楽論集を私は披見して羞紅したことがありました。それは前田先生は毎年、薬師寺修二會、薬師悔過や東大寺修二會 観音悔過（お水取り）に参籠され、「聲明」を和音や聲樂的な立場から研究され、音楽理論等の論文を発表しておられました。先生は学際的にも博学篤識なお人柄であられ、加えて日本音楽に魂魄を傾倒しておられることを悉知して、深く敬愛いたしました。

九月中旬、近鉄線西の京駅に降り立たれた前田先生に相越し、十月十一日落慶法要の迫る私の胸裡は焦燥の火炎に灼けていた時でした。『「遊く秋の」でなく、「逝く秋の」の初句に曲想が適しているか、音域・和音・聲質等が適しているか、決心がつかないのです』と話しかけて来られた前田先生の口許を私は瞠目をもって一視した。「逝く秋の」の初句は「遊く秋の」と違って、中秋以降の奈良の空の清澄さを詠み込まれた佐佐木先生のエピソードを、前田先生は奈良在住の直門の弟子さん方を訪ね聞きされ、この会談の一言であることを知った私は、愚昧の淵を低迷する恥愧の念に身が震えました。

数刻経て、淡い月影が東塔の上に微光を見せ、雁金の啼き聲のひびく境内から、疾風のように立ち去られました。

数日も経たないある日、奈良女子大学付属高校生から、薬師寺東塔を詠んだ和歌の合唱曲の練習をしていると聞いた私は、歓聲をあげて驚喜したことを覚えています。私は

その曲想、メロディーを聞きたくて学校に押しかけ、歌唱指導の先生 広藤タカ（旧姓大淵）先生に聞かせて欲しいと頼みましたが、初演当日まで作曲者に無断で聞かれることは駄目です。又先生はそれを望まれる人ではありません。とキッパリ断わられたことを思い出します。

十月十一日 清秋快晴の空。屹然とした東塔、荘嚴な落慶法要の法悦に溢れる裡に、大導師橋本擬胤師の宝塔開頭儀の所作に入るや、五色の開眼縷は秋陽に映え、上下層の開扉と共に、多色無数の散華が舞い散る中、「東塔讃歌」の調べが二部合唱の歌聲となつて、清韻な謡波となつて盛儀の伽藍にひびき渡った。伝統ある法要の正儀の次第の中に「東塔讃歌」をもつて、儀式に現代的意義付けが加わり、参拝随喜者の感動はひとしお深く、強烈に受取られたことでしょう。新聞報道等にも歌詞は云うに及ばず、歌曲歌唱ともに素晴らしいと絶賛した記事が掲載されました。

私は歌碑建立までの経緯と「東塔讃歌」が誕生した情況を私情を挟んで述べました。

次に歌碑除幕当日の状況は「九日の旅」に詳述されていますので、主催した寺側から補う小文を綴ることにいたします。

「九日の旅」小誌は「二十八日。早朝、上野精一君らが来訪せられた。薬師寺から松久保秀胤君が自動車で迎へに來られた。初夏らしい朝のラッシュアワーの街に出る。』

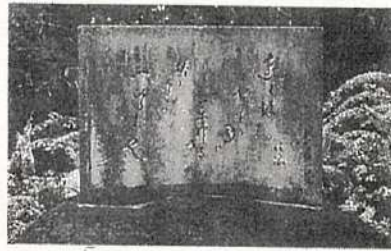
と記してある。

私は大阪ローヤルホテルを出発すれば奈良に直行すると思っていたところ、大阪御堂筋の南久太郎町附近に標石の立っている「旅に病んだ芭蕉終焉の地 花屋の跡」に車を停めて、白い百合の花の一束を供えて合掌される。先生の文学に対する謙虚な態度と感性の豊かさに敬畏の念を深くしたことでした。

河内國分・いかるが・龍田を越えるまで余暇を見ては萬葉集大家であられる佐佐木先生に萬葉集の佳歌をその地に適した一首を詠み上げたり、地名を語りながら奈良に入つたことを鮮やかに覚えています。その時に詠み上げて下さった一首が「作歌八十二年」に掲載していただきました。誠に畏れ多い事です。

奈良市に近づくと、奈良ホテルに入る前に前川佐美雄君の坊屋敷邸に寄りたいと仰言られたことです。

前川佐美雄氏は佐佐木信綱先生主宰の「心の花」の同人であり、弟子であられたでしょうが、既に「日本歌人」の歌会の主宰者でありました。前川先生は「僕は『心の花』の歌風にはどうしてもあいませんね。」と話されたことがありました。「東塔讃歌」のことで相談申し上げた時は「佐佐木先生は昭和の柿本人麿が大伴家持ですよ」と仰言られ、東塔讃歌には佐佐木先生の歌を何度も繰返しの唱歌にすれば良いと注言を受けたことでした。副住職高田好胤の熱い



「逝く秋の」歌碑

願いにはだされて会津八一先生の「水煙の天つをとめが衣手の」の歌と並唱することを諒解されたことでした。それは昭和二十八年初夏のことでした。

翌二十九年正月十五日、元旦より十四日まで國宝秘佛吉祥天女画像を本尊とした修正會が嚴修され、結願の夕方、節會らしく膳を整え、精進料理を酒肴にして祝膳が始まり、前川先生から歌碑建立の賛意を伺うために熱海まで佐佐木先生を訪ねて下さる旨申出て下さったことでした。

節分明けの翌日、大吉を下して再遇を約して下さった前川氏が薬師寺地藏院を来訪された。前川氏から「國宝 東塔のもとに、佛足蹟歌碑も立つ同じ境内に並び建つことは誠にいけないことです」と佐佐木先生は仰せられ、非常に感激され、建立除幕日が決まれば、参列する意趣であることが報告され、地藏院の茶席は悦びの興風で溢ぎりました。

早速 橋本擬胤住職は高田好胤副住職（当時）を同道して熱海の佐佐木先生邸をお訪ねすることになりました。嚴

